

琉球語の比較言語文化論

－新グスク考と新ニライ・カナイ考－

橋尾直和

(2006 年 10 月 31 日受付, 2007 年 1 月 15 日受理)

Comparative Linguistic Culture theory of the Ryukyu language
: New theory of etymology on Gusuku and Nirai-Kanai

Naokazu HASHIO

(Received : October 31, 2006, Accepted : January 15, 2007)

要旨

琉球の「グスク」は、世界遺産に登録され、「ニライ・カナイ」は、琉球文化の信仰のシンボルとされている。どちらも有名な琉球語である。しかし、両語の語源説は未だ定説がない。

本稿は、これまで語源不詳とされてきた、琉球の言語文化を代表する「グスク」「ニライ・カナイ」の語源を明らかにすることを目的としている。琉球語と古代朝鮮語、アイヌ語、オーストロネシア語との比較を中心に語源解釈を行い、両語の語源について新説を提唱した。

キーワード：グスク、ニライ・カナイ、琉球語、古代朝鮮語、アイヌ語、オーストロネシア語

Abstract

"Gusuku" in Ryukyu was registered as one of the World Heritages and "Nirai-Kanai" has been admitted as a symbol of a faith in Ryukyu. They are some of famous Ryukyu language although there has been no detailed report on the established theories in these origins yet.

This paper aims at defining these unknown origins of "Gusuku" "Nirai-Kanai" which are typical Linguistic Culture in Ryukyu.

The new theory will be proposed about the origins of these words through the comparison between Ryukyu language and Ancient Korean, Ainu language, Austroonesian language.

Key words : Gusuku, Nirai-Kanai, Ryukyu language, Ainu language, Austroonesian language

1. はじめに

筆者は、現在、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）「琉球・沖縄文化とアイヌ文化の比較研究－ヤマト文化を媒介にして－」（研究代表者：吉成直樹）の共同研究者として、調査・研究に参加している。その一環として「琉球・アイヌ文化比較研究会」を月1回、法政大学沖縄文化研究所（東京）で開催している。この会には、民俗学、文化人類学、文学、建築学、考古学、言語学など様々な分野の研究者が集い、琉球・アイヌ・ヤマトの文化について比較文化的見地から研究・討議を行っている。

本稿は、筆者が2006年7月29日に開催された「琉球・アイヌ文化比較研究会」において口頭発表した、同タイトルの「琉球語の比較言語文化論－新グスク考と新ニライ・カナイ考－」の発表内容を基に論文にまとめたものである。

2. 新グスク考

まず最初に、従来の「グスク」の語源説を掲げる。

- ①「ゴ（御）＋スク（宿）」
〔民間語源説〕（源為朝の御宿に由来するという）
- ②「ゴ（御）＋ソコ（塞）」
〔伊波普猷説〕（『伊波普猷全集・第二巻』p.352）
- ③「ゴ（御）＋シキ（磯城）」
〔鳥越憲三郎説〕（『おもろさうし全訳・第五巻』のグスクの項）
- ④「ゴ（石）＋シキ（城郭）」
〔中本正智説〕（『月刊言語』1988年9月所収「おもろ鑑賞」の語釈）
- ⑤「キ（城）＋ソコ（壁・垣）」
〔間宮厚司説〕（『おもろさうしの言語』pp.211-218）

間宮厚司氏は、『おもろさうしの言語』の中で、⑤の「キ（城）＋ソコ（壁・垣）」説について、以下のよう

に解説している。

キとは、「防備施設を備えた建造物の意で、要するに「城・砦・要塞」のことである。このキは、いわゆる上代特殊仮名遣いにおける乙類のキであり、乙類のキは「ツキ（月）－ツクヨ（月夜）」とか、「キ（木）－コヌレ（木末）」のように複合語の前に位置する場合、キ（乙類）はクまたはコと母音交替を起こす。ならば、「キ（城）＋ソコ（壁・垣）」はクソコまたはコソコに変化する可能性があり、それが三母音化すればグスクになる。

それでは、どうしてクスクの語頭がグと濁音化したのだろうか。それについては、『沖縄語辞典』（国立国語研究所、1963年）に、「guci（莖）・guma（細）・guusi（串）・guzira（鯨）」など、本来は清音のクであったものが、グと濁音化している例がある。また、これらの単語は、仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』（角川書店、1983年）でもすべて濁音化している。したがって、クスクであったのがグスクと濁音化したのであろう。

ところで、徳川宗賢監修『日本方言大辞典』（小学館）によると、沖縄県新城島でグスクは、「ぎすく」になっているが、これはキが母音交替を起こさず、キシコのままギスクと語頭が濁音化した結果なのではないか。もしそうだとすれば、「キ（城）＋ソコ（壁・垣）」説の傍証になる。

以上のように、グスクの語源を「キ（城）＋ソコ（壁・垣）」と想定し、その原義を「城の周囲に設けた石垣（城壁）」と仮定すれば、音形および意味の両面から納得のいくものになると思う。もともとは、グスクのことを単にスクという地域もあることから、ソコ（壁・垣）だけで十分だったはずである。それが歴史の流れの中で支配者（按司）の力が増大し、その規模が大きくなるにつれ「キ（城）のソコ（壁・垣）」にする必要が生じて、グスクは成立したと考えられる¹。

（間宮厚司 2005『おもろさうしの言語』：pp.214-215）

また、間宮氏は、①から④の語源説について、以下のように疑問を呈している。

①は、ゴ（御）が三母音化（大和方言のo母音が琉球方言ではu母音に変化する）により、グになるので音の変化としては問題がないが、「住みか・泊まる場所」を表す「宿」と敵の攻撃を防ぐために「石垣をめぐらした建造物」とでは、意味に隔たりがある。

②は、意味に関しては問題ないが、和語のソコ（塞）に漢語のゴ（御）が付くという語の構成の在り方に無理がある。

③は、②と同様に「漢語＋和語」という語構成が問題であるのと、スクとシキでは suku と siki で母音部分がuとiで異なっており、その理由を説明しにくい。

④も、③と同じ様にスクとシキなので音の対応に問題があるのに加え、イナゴやスナゴのゴは接尾語こ（子・粉）が連濁したものだから、ゴを「石」の意に解することはできない。

（間宮厚司 2005『おもろさうしの言語』：p.212）

筆者は、間宮氏の「グスク」における「グ」を「城」とする説に賛同する。しかし、「スク」を「ソコ（壁・垣）」とする説には、異論を唱えたい。ここで、まず、「グ」を「城」と解釈する説について検討したい。

塚本勲氏は、「城」キの語源について、朝鮮語、高句麗語と比較して、以下のような語源説を展開している²。

「城 2」	日本語	朝鮮語	高句麗語	忽 kul ~ kol
	kī	ki	kul ~ kol	ki < *koi < *kol

比較：トルコ語 qol γ an ~ qul γ an 城

モンゴル語 qol-γ an 城

満州語 golo < *qolo 省

（塚本勲 2006『日本語と朝鮮語の起源』：pp.146-151）

一方、「高句麗地名との関係」に基づき、金芳漢氏、村山七郎氏、宋敏氏は、「城」キの語源について、以下のような語源論を展開している。

（1）金芳漢説

三国史記地理志の地名を見ると、高句麗の地名では「忽」と「城」の関係がハッキリとあらわれる。しかし、新羅と百済の地名では、そのような統一性がない。「城」に対して「己、只、支、伊」などが散発的に対応しているようである。はたしてそれらが、あるいはそのうちのどれかが「城」と関係があるのか

確かではない。しかし己 (ki) は「城」を意味した可能性が高い。その理由はこうである。古代日本語に「城」を意味する ki があって、この ki が「己」と一致するものと考えられるからである。ところで、古代日本語の ki で注目されるのは、いわゆる乙類の母音 i をもっている点である。この乙類の i は *ui から変化したものと考えられているため、百済地名に見える ki の変化の過程を推定するのにあたって重要な事実を示唆してくれている。すなわち、百済地名の ki も *kui から変化したものと考えられるのである。こうした推定が正しければ、百済地名の ki (<*kui) と古代日本語 ki (<*kui) は「溝漚」とも関係がありそうである。上で見たように「溝漚」で表された kuru は *kuri ~ *kure の変化系、あるいは異形と考えられるため、次のような変化過程が考えられる。*kuri ~ *kure > ki (古代日本語) ~ ki (百済、新羅語)。こうした変化はツングース語オロチ方言の koi ‘倉’ < *koyi < *kori のような変化を思わせる (Cincius 1975 : 415)。

(金芳漢 1985『韓国語の系統』: pp.210-211)

(2) 村山七郎説

次に「城」を表す高句麗「忽」は韓国の学舎によって kol と転写され、後者は「谷」を表す朝鮮語 kol (中期語も kol) と同語であるとされている。これは、高句麗人が好んで山城に拠ったところを考えると、高句麗人が谷を意味する単語を、「城」と表すためにも用いたと考えることは困難であろう。筆者の考えでは忽は kol ではなく kuə' を表す。そして後者は三国史記 36 巻の百済地名に見られる、「城」を表す己 (悦己県=悦城郡、結己郡=潔城郡) と関係がある。己という文字は、古代日本語で乙類のキ (ki, kui) および乙類のコ (kō < *kə 又は *kō) を表すために用いられる。そして、古代日本語では「城」を意味する単語は乙類のキで表される (この場合、乙類のキは紀、機、基、奇によって表される)。古代日本語では「城」は ki 又は kui であった。そこで、われわれはこの 3 つ、つまり、高句麗 (忽) əkuə' 「城」百済 (己) kui ~ kui 「城」日本 (紀、機、基、奇) kui ~ kui を比較すると、これらが、音声の面でも、意味の面でも同一語である、同一の源にさかのぼることを推定できると思う。

興味あることに、高句麗には「高・城」を意味する合成語、達・忽 ta'kuə' があるが (「高・城」のかわりに「山・城」と言ってもよい筈である。なぜなら、高句麗語では「山」=「高」で、ともに ta' であるから)、これに音義ともに対応する taka-ki 「高城」が神武天皇の歌に出ている (古事記では多加紀、日本書紀では多伽機)。

(村山七郎 1963「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」『朝鮮学報』26 : pp.31-32)

(3) 宋敏説

取城郡本高句麗冬忽 (三国史記 35 巻)

高城郡本高句麗達忽 (三国史記 35 巻)

この他にも「城」=「忽」の関係は高句麗地名に数多く発見されるところから、我々は *kol=「城」の関係を確認しうる。これは、MK. kaβal (村) に対応するものであろう。(中略)

kaβal > kol (重刊杜詩九 17) > kol (現代)

> kol (翻訳小学九 4) > kol (現代)

文献によれば以上のような推定をすることが出来るが、中世韓国語にはすでに kol (谷、洞) という語形が存在していた。(中略)

現代国語の kol は長音であり MK. kol もまた上声であった。MK. kaβal と kol が起源的にどのような関

連があるかは知りえないが、中世韓国語にこの両形が共に存在していたところから MK. *kol* もまた高句麗語の **kol* と比較されうる。

ここで高句麗語 **kol* の意味について考えてみる必要がある。この意味を「城」という狭義に断定しやすいが、そうすると MK. *kaβal* や *kol* とは比較が難しくなる。しかし我々は **kol* を「山上に建てられた要塞」とであると見なしうる証拠をもっている。すなわち『魏志』東夷伝の高句麗関係記事に以下のような記録が見られるのである。

多大山深谷 無原沢 随山谷以為居 食澗水 無良田 雖力佃作 不足以実口腹 (『三国志』卷三十 魏志東夷伝)

この記録が伝えるところは高句麗人が「山谷」を「居」としたということである。言い換えれば高句麗地名表記の「城」とは必ずしも「山城」のみならず、むしろ「山谷」に該当するのであろうとの意味になる。結果的に「城」の意味は「谷」と通ずると解するとき、MK. *kaβal* や *kol* が高句麗語の **kol* と意味が通ずると考えうる。「城」の意味をこう見ると高句麗 **kol* は AJ. *kura* (蔵) ととも比較されうるのである。

一方、Ma. *holo* (谷) もこれに比較されるが、このことから高句麗地名表記の「忽」は文字通り **hol* をあらわしているとも見なしうる。これは高句麗語の語頭の *h-* と満州語の語頭の *h-* が対応を示す興味ある現象である。

(宋敏 1999「高句麗語の語末母音消失について」『韓国語と日本語のあいだ』: pp.188-189)

筆者は、間宮氏がグスクのグを「城」と解釈したことは、卓見であるとしたいが、スクを「ソコ (壁・垣)」と解釈したことは、問題があると考ええる。「城塞」と書いて「ジョウサイ」と読む。塞と砦は、共に音読みは「サイ」である。つまり、意味は同じ「とりで」である。塞の古訓は、ソコと読ませている。ところが、「壁・垣」には、ソコの古訓がない。筆者は、ソコに遡るとすれば、「塞」のソク[sək]が発形形であったと解釈する。『学研漢和大字典』に挙げられている、「塞」の発音と意味は、以下の通りになる。

塞 (1) ソク 𡇗𡇗 (入) 職 (徳)

sək-sək-so-sə (se)

(2) サイ 𡇗𡇗 (去) 隊 (代)

səg-sai-so-sai-sai (sai-sai)

意味 (1)①《動》ふさぐ。すきまを詰めて通れなくする。

ヤクソク
「厄塞 (運勢がふさがって悪い)」

「茅塞之 = 茅もてこれを塞がん」(孟・尽下)

②《動》ふさがる。すきまなく満ちる。

ジュクソク
「充塞」

「塞 天地之間=天地の間に塞がる」(孟・公上)

③《名》中央アジアにいた民族の名。カサ族。

(2)①《名》とりで。通路をふさいで、守りを固めるための小規模の出城。

同 砦。ヨクサイ
「要塞」

②《名》地形の険しい要害の地。

③《名》中国北方をふさぐ万里の長城のこと。

▽長城付近を塞 上・塞下といい、長城の外を塞外という。

「近塞之人、死者十九＝塞に近き人、死する者、十に九なり」（淮南・人間）

古訓 ソコ（和・図名・観名） ツヒヤス・ハカル・フサグ（図名・観名）

アツチ・カクル・セキ・ヘタツ・ミテリ（観名）

したがって、筆者は、「グスク」の語源を「城塞」に求めたい。音は[kui-sək]を推定する。グスクの成立過程は、以下の通りである。

城 塞		ギスク	グシク	
* kui-sək	>	* kī-sək-ə	>	* kīsōkō
I		II		III
				IV
				V
				>
				gusuku
				VI
				グスク
				VII

「グスク」の成立過程について、述べることにする。

I は、百済語 kui と中国語 sək の合成語の段階。

II の第1音節は、ui が乙類の i へと変化し、sək は支え母音 ə が接続して CV 構造に適應する。

II から III への変化は、ə が乙類の ō になる。

III から IV への変化は、第2・3音節の乙類の ō が o になる。

IV から V への変化は、語頭音が有聲化し kī が gī へとなる。また、琉球語に顕著な狭母音化が起こり、soko が suku になる。

V から VI への変化は、第1音節と第2音節の母音のメタテーゼ（音位転倒）。

V から VII への変化は、第1音節の母音 i の第2音節の母音 u への順行同化。「グスク」となる。

このことから、グスクは、百済語と中国語の合成語であり、おそらく韓半島で生じた語が琉球に南下して伝わった語であることが推測できる。「山上に建てられた、敵から身を守るための要塞」が原義で、古代中国語の「城」の意味でもある城塞都市、「塞の神」にもつながる「塞いで霊から守られる聖域」の意味へと派生したのであろう。

筆者は、対馬にある^{かなたのき}金田城のような朝鮮式山城が、グスクの起源であると考え。おそらく、7世紀ごろ、韓半島から逃れた百済からの亡命者が、グスクの語と築城の技術を持ち込んだのではないかと推測する。

3. 新ニライ・カナイ考

まず最初に、従来の「ニライ・カナイ」の語源説を掲げる。

①ニライのニは「土」、ラは「入ル」の約まったものか。カナイは疊語法で意味のない後付語。

〔伊波普猷説〕（「あまみや考」『日本文化の南漸』楽浪書院、1939年）

②ニライのニは根の国の「根」

〔柳田国男説〕（「海神宮考」『民族学研究』15-2、1950年）

③ニライのニは柳田説の「根」に賛同、ラは「所」、イは「方」、カナイは伊波説に賛同。

〔外間守善説〕（「ニライ・カナイの語源と語意」『日本語の世界9 沖縄の言葉』中央公論社、1981年）

④ニライは、古形「みるや」にさかのぼり、その語源は「土の屋」であり、太陽神の居所を表す語。ミが「土」、ロが連体助詞の「ろ」に当たるり、ヤが「屋」である。カナイ は、「かなや」にさかのぼり、その語源は、「日の屋」であり。ニライと同じく太陽神の居所を表す語。カは「日、太陽」を表し、ナは連体助詞の「な」、ヤは「屋」である。

〔中本正智説〕（「第6章おもしろ時代の言語研究第4節 ニライカナイの語源と原義」『日本列島言語史の

研究』大修館書店、1990年）

- ⑤ミルヤの原形はミツヤ「瑞屋」で、ミツ（瑞）は、「生命力に満ちて美しい」を表す美称辞。対句部に現れる対語のカナヤは「金屋」で、「金属製のように堅固で強」を表す美称辞。ミルヤ（瑞屋）とカナヤ（金屋）は、どちらも〈美称辞（瑞・金）＋建物（屋）〉という構成になる。

〔間宮厚司説〕（『おもろさうしの言語』pp.234-241）

ここで、従来の説において、どの説も見落としていることがあるので、この点について述べたい。

どの語源説も、「ニライ」が出发点であることが共通している。しかし、「ニライ」の他に「ギライ」の存在については、一切触れていない。「ニライ・カナイ」は、「儀来河内」と書かれている。まず、『学研漢和大字典』に挙げられている、「儀」「来」「河」「内」の漢字音の発音を挙げると、以下の通りになる。

儀 ギ 𣎵 𣎵

ɲiar - ɲie - i - i (yi)

来 ライ 𣎵 𣎵

mɾəg - lai - lai (lái)

河 ガ 𣎵 ・ カ 𣎵

fia - fia - ho - ho (hé)

内 ナイ 𣎵 ・ ダイ 𣎵

nuəb - nuəi (nduəi) - nuəi (nèi)

中古音のみ取り上げて表記すると、次のようになる。

儀 来 河 内

ɲie lai fia nuəi

つまり、「ニライ」の「ニラ」は「ギライ³」、「カナイ」の「カナ」は「ハナ」に近い音となり、「ニライ」「カナイ」を出発形とするこれまでの語源論は、成り立たないことになる。

村山(1995)は、「混効験集」の注記に着目し、ギライ、カナイのどちらも「天空」を表す語であると見なしている。この点について、筆者は賛同する。村山氏は、ギライをニライよりも古形とし、その出発形を原始オーストロネシア語の^{*}lanjit³とする。カナイは、台湾諸語の中にl音がk音に変化することから^{*}lanjit³>^{*}lagat³>^{*}laja>^{*}kaja>kanaの変化を考えているが、ニライの対語が出発形を同じくする語から変化形と見なす説は採用することはできない。カナイの語源は、他に求めるべきである。

「混効験集」の注記にヒントを得て、周辺諸国の言語を調べてみると、韓半島の言語に突き当たった。古代朝鮮語で「天空」を表す語は、ハナル[hanaɭ]である。現代語では、ハヌル[hanul]となっている。筆者は、このハナルを出発形と考える。金思燁(1979: pp.35-36)にも、同様の記述が見られる。

中本正智氏が出発形としたミルヤ・カナヤは、変化形の最も新しい語形である。「屋」であると考えた[ja]は、[i-a]からの変化形と見る。ニライ・カナイの成立過程は、以下の通りである。

ギライ・カナイ ニライ・カナイ ニルヤ〜ミルヤ・カナヤ

^{*}lanjit³>^{*}ɲila>ɲila-i>nirai>nirai-a>niraja>niruja>muruja

I II III IV V VI VII VIII

^{*}hanaɭ>^{*}hana>^{*}kana>kana-i>kanai-a>kanaja

I II III IV V VI

まず、「ギライ」の成立過程について、述べることにする。

IからIIへの変化は、原始オーストロネシア語^{*}lanjit³の語頭第1音節のメタテーゼ（音位転倒）。

さらに、最終音の *t* が脱落。

Ⅲにおいて、アイヌ語カムイ *kamui* 「神」の最終音の「神を表す名詞形接辞-*i*」と同じ-*i* が接続。

ⅢからⅣにかけて、ギライがニライになる。

ⅤからⅥへの変化は、さらに琉球語に顕著な愛称辞-*a* が接続、さらに変化し「ニラヤ」となる。

Ⅶにおいて、第1音節の母音 *i* が第2音節の *a* を狭母音化させ *u* に変化する。「ニルヤ」となる。

Ⅷで琉球で顕著な *ni* と *mi* の交替が起き、「ミルヤ」となる。

次に、「カナイ」の成立過程について、述べることにする。

ⅠからⅡへの変化は、古代朝鮮語 *hanal* の第2音節の母音が順行同化によって *hana* となり、さらに、最終音の *l* が脱落。

ⅡからⅢにかけて、*h* 音が *k* 音で取り入れられる。

Ⅳにおいて、アイヌ語カムイ *kamui* 「神」の最終音の「神を表す名詞形接辞-*i*」と同じ-*i* が接続。「カナイ」となる。

ⅤからⅥへの変化は、さらに琉球語に顕著な愛称辞-*a* が接続、さらに変化し「カナヤ」となる。

ニライがギライに遡り、さらに原始オーストロネシア語 *lanit* に遡ること、カナイのカナがハナに遡り、さらに古代朝鮮語ハナルに遡ることが分かった。このことから、ニライ・カナイの源流は、ニライとして南方系である原始オーストロネシア語的要素が先にあり、カナイとして古代朝鮮語がかぶさって成立した語であることが判明した。

4. おわりに

本論では、琉球語と古代朝鮮語・アイヌ語・日本語諸方言とオーストロネシア語を比較することにより、「グスク」「ニライ・カナイ」の語形変化の過程を探ることができることを検証してきた。

以上のように、東アジアのなかの琉球語・アイヌ語・日本語諸方言をオーストロネシア語とのみ比較するのではなく、韓半島およびユーラシア大陸の言語と比較することにより、その成立過程が明らかになることが実証できた。

今後の課題としては、琉球語とアイヌ語を結ぶ *linker* とも言える、土佐方言、伊豆諸島方言、対馬方言を始めとする日本語諸方言とオーストロネシア語・韓半島の言語・ユーラシア大陸の言語の比較研究を進めていくことが考えられる⁴。

【注】

1. 中本(1981: p.358)には、見出し「垣」の中の「グスク」の説明として、以下の記述が見られる。

『おもろさうし』の「ぐすく」は、王や按司の居城を表すほか、声域・祭祀場を表している。城の代表格として首里城があり、「ぐすくおとの」(城御殿)といえは首里城内の御殿ということだ。「やらさもりぐすく」と「みえぐすく」は那覇港の入口に相対し、1554年に築城された外敵を防ぐ城であった。これらの城の形から石垣を積み上げるということが「ぐすく」の原義であったことがわかる。「ぐすく」にははじめから聖域の義があったわけではない。八重山のグスクをみてもわかるように、単なる石垣を指すのであって、その囲いが聖域というわけではない。城と称されたところを後から聖域としたために、多く重なるようになっただけのことである。」

2. 塚本(2006: pp.144-146)に、「城1」として、河野六郎氏の「サシ」の記述(『河野六郎著作集I』)と、『時代別国語大辞典』の「き(城・柵)」の記述を掲載している。「城2」として、本稿掲載の金芳漢氏と村山

七郎氏の語源説を紹介している (同: pp.146-151)。

3. 正確には、軟口蓋鼻音で始まる「ギ」[ŋi]に近い音声であったと推定される。

4. 筆者は、先行研究の橋尾(2005a)・(2005b)において、「琉球語・アイヌ語と日本語諸方言 (土佐方言)・オーストロネシア語との比較研究」を行っている。

【参考文献】

- 李男徳(1988)『韓国語と日本語の起源』学生社
- 泉井久之助(1975)『マライ=ポリネシア諸語ー比較と系統ー』弘文堂
- 上垣外憲一(2003)『倭人と韓人』講談社学術文庫
- 川本崇雄(1978)『南から来た日本語』三省堂
- 金思燁(1979)『記紀萬葉の朝鮮語』六興出版
- 金芳漢(1985)『韓国語の系統』三一書房
- 崎間敏勝(1989)『ニライ・カナイの原像』緑林堂出版
- 崎山理(1974)『南島語研究の諸問題』弘文堂
- 佐々木高明(2003)『南からの日本文化 (上) ー新・海上の道ー』NHK ブックス
- 下野敏見(1994)『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館
- 宋敏 (菅野裕臣・野間秀樹・浜之上幸・伊藤秀人訳) (1999)『韓国語と日本語のあいだ』大修館書店
- 田村すず子(1983)『アイヌ語基礎語彙』早稲田大学語学教育研究所
- 知里真志保(1975)『知里真志保著作集別巻Ⅰ・Ⅱ』平凡社
- 塚本勲(2006)『日本語と朝鮮語の起源』白帝社
- 藤堂明保編 (1978)『学研漢和大字典』学習研究社
- 仲原善忠・外間守善(1967)『おもろさうし辞典総索引』角川書店
- 中本正智(1981)『図説琉球語辞典』金鶏社
- (1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店
- 橋尾直和(2002a)「高知県物部村市宇月谷方言における可能助動詞「サル」に関する覚書」(『四万十・流域圏学会誌』第1巻第1号) 四万十・流域圏学会誌
- 編著(2002b)『消滅に瀕した高知県限界集落の言語・民俗Ⅰ』環太平洋の「消滅に瀕した言語にかんする緊急調査研究事務局
- (2004)「古層語可能助動詞「サル」に関する考察ー琉球方言と土佐方言の比較に基づいてー」(『沖縄学』第7号) 沖縄学研究所
- (2005a)「琉球語・アイヌ語・日本語諸方言とオーストロネシア語の若干の比較」(『高知女子大学文化論叢』第7号) 高知女子大学文化学部
- (2005b)「土佐方言・アイヌ語・琉球語とオーストロネシア語との比較ーアイヌ語「hese」との比較を中心にー」(『語文と教育』第19号) 鳴門教育大学国語国文学会
- 服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店
- 埴原和郎(1993)「日本人集団の形成ー二重構造モデルー」(埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』朝倉書店
- 平山輝男・大島一郎・中本正智(1966)『琉球方言の総合的研究』明治書院
- 外間守善編著(1970)『混効験集ー校本と研究ー』角川書店

- (1972) 『おもろ語辞書—沖縄の古辞書混効験集—』 角川書店
- 間宮厚司 (2005) 『おもろさうしの言語』 笠間書院
- 宮良當壯 (1926) 『採訪南島語彙稿』 (『宮良當壯全集 7』 1980) 第一書房
- 村山七郎 (1963) 「高句麗語と朝鮮語との関係に関する考察」 (『朝鮮学報』 26)
- (1982) 『琉球語の秘密』 筑摩書房
- (1992) 『アイヌ語の起源』 三一書房
- (1993) 『アイヌ語の研究』 三一書房
- (1995) 『日本語の比較研究』 三一書房
- 李基文 (村山七郎監修・藤本幸夫訳) (1975) 『韓国語の歴史』 大修館書店
- (1983) 『韓国語の形成』 成甲書房
- Batchelor, J (1938) *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. Tokyo
- Dahl, O.Chr (1977) *Proto-Austronesian*. Lund
- Dempwolff, O. (1934) *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. I. Band*. Berlin, Hamburg
- (1937) *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. II. Band*. Berlin, Hamburg
- (1938) *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes. III. Band*. Berlin, Hamburg
- Tsuchida, Sh. (1977) *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa. Tokyo
- Wurm, S.A and Wilson, B (1975) *English Finderlist of Reconstructions in Austronesian Languages* (Post-Brndstetter) Canberra